理想を追い続けた錬鉄者の祈り

カオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理想を追い続けた錬鉄者の祈り

【Ｎコード】
Ｎ８２６３Ｍ

【作者名】
カオス

【あらすじ】
正義の味方がネギまの世界にいっちゃいます注意作者は小説をかくのがはじめてです　誤字や脱字などいろいろあり気に入らないと思いますしかしあくまでもこれは、作者の趣味としておこなっているのでご了承ください

終わりからのはじまり（前書き）

どうも初めて投稿しましたＦａｔｅとネギまのクロスオーバーです
少し違和感や変なところあるかもしれませんがこれから完結を第一目標として頑張っていくのでよろしくおねがいいたします

終わりからのはじまり

俺は、衛宮士郎今死にかけている
魔術を秘匿するというルールを破り魔術協会に封印指定をかけられ
追われて凄腕の魔術師やら代行者などと戦っていたからだ
だかここで死ぬわけにはいかない！！

「っ！！」
「ひさしぶりね衛宮君」
「・・・遠坂なんで」
「あら、それはあなたがよくわかってるんじゃないの？」
「俺を捕まえに来たのか」
「えぇそうよあなた達少しやりすぎたのよ　まったくあれだけ言ったのに　あなた達が封印指定されないようにどれだけ頑張ったと思ってるのよ」
「・・・・・ごめん」
「申し訳ございません」
「はぁ～まったく結局こうなっちゃったか・・・だけどね私は今回は容赦しないわ」
そう言って遠坂は宝石剣をだしたそれと同時にフィリアは大型の銃を構えた
「フィリア銃をおろせ！遠坂もだ」

「ごめんなさいそれはできないわ」
「・・・・・申し訳ございませんご主人様」
「クソ！！！」そう言って俺も偽・宝石剣を投影した「フィリア下がってろ・・・いくぞ遠坂」
そう言って俺と遠坂は宝石剣を振るった

終わりからのはじまり（後書き）

［士］なんでさ・・・

［フィ］なにが？

［士］　いやさぶっちゃけありえないだろこの設定どんだけ俺最強設定されてるの！？

［フィ］　　あぁ～そのことですか実は作者は最強設定好きの中２病野郎なんですよ

［士］　限度かあるだろ！？宝石剣なんて投影できたりこれからの話をみるかぎり本当に最強よ俺［作者］　ちなみに士郎の師匠は青子さんと宝石爺と鐙子さんだから～

［士］　あぁ～忘れろ消えろあの修行時代

［フィ］　ねぇ作者さん私はどいう設定なの

［作者］　ん～簡単にいえばツン「ダダダダ」がは［フィリア］申し訳ございません手がすべりました

［作者］　「ドクドクドクドク」　いや～デレるのは士郎の前だけみたいだね　それではすこし説明しますがさっき士郎が言ったように修行時代ありそのとき一度ネギまの世界に飛ばされました本当はさきにそれを書こうと思ったのですが完成したあとに気がついたため外伝として投稿させていただきます

［作者・フィ］　それではまた次回

第一章異世界での出会い（前書き）

結構頑張って書きました

第一章異世界での出会い

「ん・・・・・うん？ここは、どこだ？」
「ここは、俺の世界さ正義味方」
そう言って身体中に刺青みたいのをした衛宮士郎に似た男があらわれた
「・・・・・アンリマユ」
「正解だ」
「なぜお前がここに？」
「それはこっちのセリフだ正義の味方なんで英霊でもましてや死んでもいない奴がここにいるんだ」
「俺は宝石剣で遠坂と撃ち合って・・・・・・！そうだフィリアは！！」そう言って士郎はまわりを探した、だかここは聖杯のなかであり少しの灯りはあるものの回りは、ほぼ暗闇で探しても見つかるわけがない
「あぁ～安心しろお前と俺以外ここには誰もいないしそのフィリアって奴はここに来ていない」
「そうか・・・ありがとう」
「あぁ～別に良いさところで正義の味方」
「なんだ？」
「お前は運が絶望的に悪いくせに今回は運がいいらしいな」
「なんの話だ？」
「なに聖杯戦争はもうおこらないからな最後に俺の力を使って聖杯戦争の勝利者であるお前の願いを叶えてやるってわけだ」と言ってアンリマユはケタケタと笑った
「・・・・・悪いが俺に願いごとなんて無いぞ」
「なんでもいいからねがっちまえよじゃあないと・・・・・・・・・・・・・・・・・・俺が外に出ちまうかもよ？」「！！！」
「何を驚いやがる確かにお前らは聖杯を破壊した　だがしかしあく

までも破壊したのは器だ大聖杯のほうを壊してないんだだから大聖杯には魔力は、たまり続けてるってわけしかも前回と今回も魔力は、ほとんど使われてないからな中身はほぼ埋まって受肉するにはあと少しってわけだ」
「じゃあまた聖杯戦争がおこるのか！？」
「だからさっき言っただろもう聖杯戦争はおこらないって・・・だって俺が外に出てたら人間を殺しつくすからな」ケタケタ
「・・・・・・・・・・・」
「まぁそんな顔すんなよお前が願いを言えばすむことだ」
「ん～願いっていってもな」
「人生をやり直すとか」とアンリマユが提案したが
「俺はそんなことするつもりはない」とバッサリと切り捨てられた
「じゃあ自分殺しとかか」
「俺を赤いのと一緒にするなそもそも俺は後悔なんてしていないし絶望していない！」
（そうあいつは助けられなかった人ばかりをみて助けられた人を見ようとしなかったからな・・・・それにしても願いか～・・・！）
「なぁアンリマユ願いはなんでもいいんだな？」　「？あぁいいぞそれで決まったのか？」　「あぁそれでどうすればいいんだ？」
「なに簡単だ俺がこの呪いを元の無色の力にもどすその間に俺に願いを言えばいい」　「あぁわかった」　「それじゃいくぞ！！」
「ああ」そうしてアンリマユが呪いを元の無色の力にもどした
「今だ！！」
「アンリマユを呪いから自由に自由にしてくれ」「な！？なに考えてやがる」
「いやなに受肉するなら呪いさえが無くなればお前は普通の人間として生きられるじゃないか」　「なんでそんなこと願ったんだ！

？」
「なに俺は頑張ったやつが幸せになれないのが嫌なんだ」
「はぁ～～～～わかったよこれからよろしくたのむぜ相棒」そう言ってアンリマユは士郎の中にはいりこんだ
「は？」
そうして空間に穴があきそこに士郎は落ちた！！それはもうきれいに落ちた
「なんでさーーーーーー」
途中どこかでイリヤの声が聞こえた気がした

「なんだこの気配は？　　くっ！！」
（少し油断したか！！）
「奥義・斬岩剣」
ぐぁーー鬼たちが次々にかえっていくがしかし（数が多すぎる！！）
「くっ　さすがに1人ではきついかっ！」それでも桜咲刹那はどんどん鬼を斬っていく
「うっ」それは本当に少しの隙だったしかしこの数を相手にはそれは致命的な隙だった
「やられる！」　背後からの攻撃に気づくことはできたしかしそれまで抵抗することもかなわず必殺の一撃が桜咲刹那を襲う

はずだった
「ぐわっ！！」鬼が突然倒れた

（龍宮か？）
「ぐわっ」
「なんやこれどこからうって「グサ」がっ！！」
（すごい）その一言しかでなかったなぜならその光景があまりに圧倒的だったからだ
「あれは一体誰だろう」そこには赤い骸布をまとった男がいたｓｉｄｅ士郎
「またかここはもとの世界じゃないな　まぁ平行世界ってところか」士郎は修行時代から師匠達に修行としていろいろな平行世界［だいたいがかなり危険場所でしかも一番危険って状態のときになっているところにわざわざベストなタイミングで落とすのである］
「イリヤ」
ここにくる途中彼女の声が聞こえた
「魔術に関わらず幸せにくらして・・・か」

「まあとりあえず体の状態からだな」
「同調　開始」　＞トレース　オン＜
魔術回路・・・５２７本正常
身体の損傷・・・　戦闘はほぼ不可能
全て遠き理想郷＞アヴァロン＜肉体の変化および魔術回路の変化によって起動準備中
固有結界・・・　仕様不可能・理由不明
投影　干渉漠邪　「偽・螺旋剣」　＞カラドボルグ＜
　　その他無名の剣　熾天覆う七つの円環
　　＞ロー・アイアス＜　聖杯とパスが通っているため　鐙子作の人形　など投影可能
　　しかしその他宝具仕様不可　理由不明
強化・解析・・・仕様可能
肉体年齢１４～５
身長１８８ｃｍ

身体能力・・・正常
「なんでさ」とにかく異常の一言
（どこに中学生くらいで１８８越えるやつがいるんだ！！しかもなんだこのハイスペック魔術回路が５２７本しかも聖杯と繋がってるだと！？）
「まぁ鐙子さんの人形はなんども解析してるけど投影可能とは・・・まあためしに」
「投影　開始」　＞トレースオン＜
（・・・できちゃったよ　魔力の糸で操作が可能かやってみるか）
「うん、なかなかいいな　ん？この気配・・・・・人形を使って視覚共有をして「やっぱりか」
「！！」（女の子が襲われてるトレースオン）すぐさま洋弓を投影して矢で鬼たち次々と貫いた
「よし！」（なんとかしたがまずいな女の子が追ってきてるとりあえず人形を俺と子ギルの共同作品の蔵の中にいれて空間を元に戻して今度は師匠達との共同作品魔力殺し君これで魔力を外にもらさず抑えられるのでバレナイ）さてこれで大丈夫かな？

ｓｉｄｅ刹那
（あの人は一体・・・次々と鬼たちを貫いた腕前百発百中とはあの矢のことでしょうっと考えが横道にそれてしまったとにかく侵入者なら捕まえるか、お嬢さまの危険になりそうなら排除しなければ）
「ぐっ」
「誰だ！」
そこには銀色のような髪が特徴の青年が倒れていた
「くっ」ひどい傷だった生きてるのがやっとみたいだ
（一般人がいたかすぐに病院にはこばなければ！！）
こうして理想を追い続けた錬鉄者と平行世界とのはじまりの物語が終わった

第一章異世界での出会い（後書き）

［フィ］　この度は士郎さまのお話理想を追い続けた錬鉄者の祈りをみていただき、まことにありがとうございます。今回は最強設定とオリジナルの能力開発のようなお話でした

［士］　あぁ～フィリア本当にこの状態の俺でいくのか？

［作者］　もちろんさ～正直言うとこれからどんどん強くなってもらうよ

［士郎］　・・・・・・そういえばなんで固有結界使えないんだ作者あんた好き固有結界

［作者］　まぁ簡単に言うと物語を少しでも面白くしようっていう俺の配慮

［フィ］　正直に言うと

［作者］　眠かったからです…あ

［士・フィ］　消えろ作者ーー

［作者］　フッ作者なめんなよ自分の作品の中では最「クスクス」きょ　ガクガクプルプル桜さんちょ何その黒いのまて無理ぎゃーーーーー

［フィ］　え～アクシデントがありましたが無視

でそれでは士郎様にアドバイスですが　士郎様は心の整理がまだついていない　ようすですから固有結界がまだ使える　状態ではありませんしっかりと自分の　と対決してください多分そこでは

自らの運命と戦うことになるでしょう

がそれはまだまださきのお話です

それではまた次回お会いできることを

祈っています

第2章　交差（前書き）

今回は、外伝てきな話なので物語は、あまり進みません

第2章　交差

「ん・・・・・・ここは」
そこには、まるで墓のように地面に刺さった剣がたくさんあった
「俺の心象世界か」
（しかしなぜここに）
そう考えていると前方には紅い弓兵が立っていた
それは、まるでこの世界の王であるかの様に堂々としていた
「アーチャーなぜお前がここにいる」
「さてな私もなぜここにいるのかは、わからんが・・・なるほどそういうことか」と最後あたりアーチャがなにか言ってたみたいだか声が小さくて聞き取ることができなかった
「ふむ、ひとつ良いか衛宮士郎」
「なんだよ」
「お前は、正義の味方を続けるのか？」
「・・・・・・俺は、まだこの世界に来たばかりだからなんとも言えない」
「だけど例えどんな世界でも助けを求めている人がいるなら俺は、その人達を救っていこうと思う」
ｓｉｄｅアーチャー
衛宮士郎は、どこか迷っているようだったが、それでも奴は、はっきりと自分の理想をつげた、ならば…
私もこれからどうするか考えなければなるまい
「その心に嘘や偽りは、ないか？」
「ああ、借り物の理想だけどそうしたいと思ったのは、俺の意思だその心に嘘や偽りは、ない」
フッ愚問だったようだな

そろそろか

ｓｉｄｅ衛宮士郎

「その心に嘘や偽りは、ないか？」

あいつは、まるで俺を試しているかのような目で見ていた。だか俺は、そんなことは、気にせずはっきりと言った

「ああ、借り物の理想だけどそうしたいと思ったのは、俺の意思だその心に嘘や偽りは、ない」

その答えに満足したのか

皮肉げにだけど、どこか嬉しそうな表情で笑っていた

すると突然

「うわ！なんだ」

突如体が光はじめた

「ぐっ！！」

いきなり頭の中になにかを詰め込まれたような感覚が襲ってきた

「第一試験合格と言ったところか」アーチャーはそう冷静に話した

「アー、チャー」

「いいか、衛宮士郎また力が必要になったら、ここに来い」

薄れる意識の中確かにあいつがそう言ったのを聞いた

目を覚ますとそこは、見なれない天井と清潔感のある部屋だった。

「ここは、どこかの病院か」あたりを見回していると、ドアが開いた

ｓｉｄｅ刹那

私がもう少し周囲に気をつけていればあのように一般人を傷つける

ことは、なかっただろう
「まだまだ修行が足りないな」
あの人は、大丈夫だろうか一応責任は、あるし見に行ったほうがいいだろうし
もしも、あの夜私や鬼達を見ていたのなら話題になったりしたら困るので記憶を処理するしかないだろう
もしそうするなら寝ている今がチャンスだろう
とにかくそう判断するのは彼の状態を見てからの方がいいだろう
そう思い病室に向かった
すると病室から人の気配が感じられた
（意識が回復したのか）
さてどうしようかと思いつつ扉を開いた
ｓｉｄｅ士郎
扉が開いたから多少警戒しつつもその方向見て何があってもすぐに対象できるようにした
するとそこには、あの時の少女がいた
「こんにちは」
「あ、ああこんにちは」
「お体のほうは、大丈夫ですか？」
「ああ大丈夫だけど君は」「私は、桜咲刹那です。」と礼儀正しく礼をした
「それでは、刹那とあぁこの響きは、君によく似合っている」
「あ、ありがとうございます。それであなたの名前は？」
と少し顔を赤らめながら刹那は、聞いた
「俺は、」
と自分の名前を言いかけてやめた
普通なら教えてもいいんだがここは、平行世界だ
もし自分の名前を教えて万が一調べられでもしたら戸籍が無いことなどすぐにバレてしまうしあの夜の様子からして刹那は、ただの一般人では、ないだろうと判断した

そこで彼が考えたのは、
アーチャーが真名を話さないためについた嘘である
（あいつが使った手段を真似るのは、なんだか癪だかこの際しかたがないか）
「すまない、自分の名前がどうも思いだせないみたいだ」
「え！？それじゃあここにいる理由とかも」
「すまない何も思い出せないんだ」
「い、いいえ気にしないでください。もしかしたら時間をおけばあっさり思いだすかもしれませんし！」
「あぁ、ありがとう」
［くしゃくしゃ］
「えっと、あの…」
「ん？ああすまんなんだか体が勝手に」
「いいえ、だ、大丈夫ですのでそ、それでは、」
と走っていき
［ガツン！！］
「あう！！」という声が聞こえた
「元気な子だな～」と士郎は、見当違いなことを思っていた

ｓｉｄｅ刹那
不覚にも私は、頭を撫でられたとき気持ちいいと思ってしまった
「はぁ～それにしても記憶喪失か一応学園長先生にお話したほうが良いだろうか？」
そう思い学園長室に向かった
ｓｉｄｅ近衛門
「失礼します」
「うむ、入ってきなさい」
「意識が回復したそうじゃが様子は、どうじゃ」
「それが、記憶喪失らしく何も思いだせない、そうです」
「フムそうか、なら少し様子を見るしかないのう」

「はい・・・それでは、失礼します」
「うむ、ご苦労さんじゃた」あの夜の膨大な魔力は、
彼のものじゃと思うたっとんじゃがのう彼からは、魔力は、全然感じられなかったからのう、となるとやはり刹那君が言っていた赤い男のほうかのう
ｓｉｄｅ士郎
あの後もう一度寝てみたがアーチャーには、会えなかった
「そういえば、あの時なにかが頭の中に入ってきたような」
「よし、考えても仕方がないし」
「同調・開始」
＞トレース・オン＜

身体能力・・・上昇
＞全て遠き理想郷＜
アヴァロン・・・正常稼働中投影・・・＞赤原猟犬＜
フルンディングが　　解禁その他武器の　　投影も可能
「同調・終了」
＞トレース・オフ＜
（まだ戻ってない武器もあるが戦闘には、問題ないだろう）
さてこの後は、どうするかな　いつの間にか部屋は、監視されてるみたいだけどまあ安全だろう、それにまともに寝るのも久しぶりだしここは、一般人を装おって監視に気がついてないふりをしておくのが無難だな「それじゃあもうひと眠りするか」
そうして目を閉じると簡単に眠りにおちた

再び眠りから覚めるそこに眼鏡をかけた男がいた
「目が覚めたかい」
ｓｉｄｅ高畑
最初彼の顔見たとき
僕は、驚いてしまった
「エミヤ？」
そう彼の顔は、昔一時期だけど紅き翼メンバーとしてともに戦ったナギの親友の顔に似ていた
「でも彼は、白髪では、なかったな」
あの時のことを思いだした彼は紅き翼の中でもナギと対等かそれ以上の強さをもっていた。それでも彼はその力に慢心することなくいつも鍛練をおこたらなかった。戦いの時だって彼はすごく活躍していたし困った人を見つけるとすぐに助けにいったし彼が作った料理は、みんなおいしかった。しかし街の人や魔法使い達は、彼の使う魔法を見て恐怖して彼のことを［剣の王］や［千の剣の男］呼ばれていたようだった
そのせいか助けたはずの人に刺されたり嫌われたりしてた
だけど紅き翼のメンバー達は、彼がどんな魔法使っているかなど気にせず彼のことを信頼していた
ナギは、そんな彼だからこそ彼のことを親友だと言っていた
いつも彼は、ナギと共にいろいろな組織を潰していたが讃えられるのは、いつもナギだけだった、だから
いつもナギや僕達が、それに怒ろうとしたがそれをいつもエミヤが止めていた
彼は、言った
「別に誰かに誉められたくて人助けをしているわけじゃない」と
彼は、本当の意味での

＞立派な魔法使い＜
マギステルマギだと思った大戦後やっと彼のことは、ナギのおかげでみんなに認められた
だけどそのことを知る前に彼は、いなくなっていた
ナギに聞いてみたら
自分の戦いに戻ったと悲しそうに言っていた
あの時のナギの表情は、今でもおぼえている
「なつかしいな」
そうやって昔のことを思いだしているとベッドで寝ていた青年が起きた
「目が覚めたかい」
ｓｉｄｅ士郎
「体のほうは、大丈夫かい」「はい、もう痛むところはないです」
「そうか、一応退院は、いつでもできるようにしてあるからね」
「なにからなにまでありがとうございます」
「いや、気にしなくてもいいよそれより行くあては、あるのかい？」
「一応あります」
「そうかそれでは、そろそろ僕も仕事に戻らなくちゃいけないからねお大事に」
「ありがとうございます」
そうして眼鏡の男の人には病室から出ていった
「じゃあ着替えて外に出てみるか」

第2章　交差（後書き）

［士］バトルは、まだまだ先そうでよかった
［作者］意外と速いかもよ
［フィ］私の出番は？
［作者］ん～結構あとかな
これからもう少しオリジナルストーリーだからネギまの本編に突入してからの登場だからね
［フィ］そうですかならしょうがないですね
しばらくは、あとがきだけの出演ですね
［作者］そゆこと
さて今回はナギたち紅き翼との話を大まかに書きましたこの話をしっかりとした感じで読みたいかたは、
読みたいと言ってくださいそれでは、また次回

第3章　新たな生活（前書き）

バトル描写とアーチャーの皮肉なセリフムズッ！！
まあ読む気がうせたら捨てちゃってくださいそれでも作者がんばれと言う人
待っていてくれ速く仕上げるから！！

第3章　新たな生活

ｓｉｄｅ　士郎

退院してから1週間後俺は、カフェ［アヴァロン］を営んでいた。
そのときは、戸籍を手に入れるための、つてがなかったため
この物件を借りるのに管理人には、暗示の魔術をかけることにした。
そして建物の掃除をして
キッチンには、投影した料理器具や紅茶やコーヒー、食材などをしまっておいたそうしてメニューに入れる料理や料金の設定などを考えているとあっという間に1週間たっていた「暇だな」アヴァロンには客は、1人もいなかった
「まあ、当然か宣伝もあまりしてないし開店したばかりだしな・・・チラシでもつくってみるかな？」
それから数時間してお昼頃に客は、3人来たがそれからまた時間があいた
「時間の無駄だし外を見て回りたいがでも店をあけるわけには、行かないしな・・・そうだ！」
士郎は、蔵から以前投影した人形を取り出した
「これなら視界共有をして外にでれば、店をあけずに外に出れるな」
そう思いすぐに実行した

「ふ～」
店を閉めてから人形を蔵に仕舞い今日のことを思い出した
あれから人形を使い外に出てすぐにいろいろと困っている人達に出

会った
最初は、

身長が高くて何も喋らないせいか誤解されたが手伝いや人助けをしていくうちに打ち解けることができた
その他にも車に引かれそうになった子供を助けたり
かつあげしてる不良をとっちめたりした
「最初こそあれだったけどなかなか充実した1日だったな」
そう思いながら眠りについた
ｓｉｄｅ近衛門
今日紅い男が現れた。
その男のあとをひそかにつけさせていたら見知らぬカフェに行き着いらしい
そこの店主は、以前記憶喪失になったという青年だった
「つながったか・・・明石君」
「はい」
「彼について調べてくれんかのぅ」
「わかりました」
「瀬流彦くんは、彼の監視を頼む」
「はい」
そして2人は、部屋から出ていった
「ヤブをつついてみたが何が出てくるかのぅ」

ｓｉｄｅ士郎
まだあまり日が昇っていない時間に俺は、目が覚めたその後朝の鍛練を終えて地形を把握するため最近日課になりつつある散歩に向かった

ｓｉｄｅ明日菜
「じゃ　行ってきまーす！」　「よろしくねアスナちゃーん」
「ちょっとアンタ佐藤君が風邪で起きれないって」
「あちゃー流行ってからなあ」
「あ、じゃあ私かわりに行きますよ」
「いや、でもすごい量だよ平気かい？アスナちゃん中学生だし女の子だしよ」
「大丈夫ですよ！私　体力だけは、自信ありますから
それじゃあ行ってきまーす」
「ふぁ～～～ねむ…まったく昨日は、ひどい目にあったわよ」
ホントあのチビ魔法使いときたら～～～
「とと・・・・やっぱちょっと重かったかな？」
「手伝おうか？」
「へ？」
そこには、意志の強そうな目とキレイな白髪が印象的な男の人が立っていた

ｓｉｄｅ士郎
「手伝おうか？」
散歩の途中１人分にしては多い新聞を配達している子につい反射的に声をかけてしまってもちろん相手も知らない人にそんなこと言われてどこか戸惑っているようだった
「いや、大丈夫ですよこれくらい」
「全然大丈夫そうじゃないぞ」そう言って半ば無理やりに新聞をとりあげた
「それじゃあ俺は、こっち側をやるから君は、そっち側を頼む」
「むぅ、わかったわよ」
そうして走り始めた
「くっ、あんたなかなか足速いわね」

「そうか？君は、女の子なんだからあんまり無茶するなよ」その言葉が癪だったのか彼女はさっきよりもスピードを上げた
「私のほうが速く配達するんだから！」

そうして無事新聞を配達し終えた
「はぁはぁ…ア…アンタ私よりも速いなんてすごいじゃない」
「いや、そういう君なかなか速かったよ　はいコレ」
「ありがとう　ねぇアンタ」「ん？」
「アンタ名前は？」
「俺は、衛宮士郎だ君は？」　「私は、神楽坂明日よろしく士郎」
「ああよろしく」

「それで士郎なんで手伝ってくれたのよ？」
「なんでって女の子が1人で運ぶには重そうだったしこんな朝早く女の子が1人だと危ないだろ？」
「それだけ？」
「それだけだが？」
「はぁ～アンタお人好しって言われるでしょ」
「む？なんでわかったんだ」「そりゃわかるわよ　それで手伝ってくれたお礼に何か手伝えることとかない？」「うーん、特には…そうだ！俺カフェを開いてるんだもしよかったら友達でもつれて来てくれ」
「アンタちゃかりしてるわね　なんて店なの？」
「アヴァロンだ」

「そう、それじゃあさっそく今日の学校の帰りにでもよらせてもらうわ　それじゃあね」
「ああまたな」

そうして夕方
「ああここよここ」
「へぇ～なかなかお洒落な店やな～」
「そうですね～」
「いらっしゃい何する？」
「あ、士郎なんかオススメある？」
「そうだな～ケーキセットなんかどうだ？」
「じゃあそれで、木乃香とネギもそれでいいわね？」　「はい」
「ええよ～」
「それじゃあ少し待っててくれ」
「なあなあ明日菜あの人誰？」
「ん？今朝話した新聞配達を手伝ってくれた人よ」
「へぇ～なんかかっこええ人やな」
「そう？そんなことないと思うわよ」
「ア…アスナさんそんなこと言っちゃダメですよ～」　「そうだそ、明日菜特に本人が目の前にいる時とかな」
「え！？士郎アンタいつの間に」
「今来たとこだよ　はい、ケーキセット」
「そ、それじゃあいただきます」

「いただきます」
「いただきます」
パク・・・！・・・パクパクパク
「何よこれ凄く美味しいじゃない！！」
「本当です。それに紅茶も美味しいですよ！」
「おいふぃーな～」
「そうかありがとう」
「なんでこんなに美味しいのにお店がらがらなのよ」
「多分あまり宣伝してないからかな？」
「もったいないですよ！そうだ明日菜さんクラスの人達に教えてあげましょうよ！」
「そうね朝倉あたりに頼んだらすぐにでも広まるわね」
「モグモグ」
「それじゃあご馳走さまでした」
「ご馳走さま」
「またくるえ～」

「ふぅ～なんか話しを聞いた限りじゃあ明日から大変になりそうだな」
と少し嬉しそうにしながら食器などをかたずけた
そうして外もそろそろくらくなったころ店を閉めようとしていると
（監視されてるな、しかも数人いるみたいだな。さてどうするか）

ｓｉｄｅ近衛門
「調べた結果彼がここに来た時の魔法は、わからず
該当する魔法は、ありませんでした。それにあの物件の管理人には、

わずかですが魔力の後がありました。そして書類を見せてもらって調べたところ彼の戸籍は、ありませんでした」
「フム、そうするとなぜここに来たかじゃな…こればっかりは、本人に聞くしかあるまい至急魔法先生および魔法生徒を向かわせてくれワシは、高畑君をつれて後から行く」
「わかりました」

ｓｉｄｅ士郎
この状況からいってバレタみたいだな本当に運がないな
「はぁ～魔術には、あまり関わりたくないんだけどなまあここにいてもあまり意味がないしなるべく穏便にすませたいな」多分叶わぬ夢だろうが
そう思いながら外に出た
「そこまです。おとなしく我々の質問に答えてくださいそうすれば我々は、あなたに危害をくわえません」
「やれやれ話し合うなら礼儀というものがあるだろういきなり大人数で押し掛けて武器を向けられているのに、危害をくわえないという話を信じろと？」
「わかりました」そう言って他の人も杖をおろした
「これでいいですか」

「一つ聞きたいのだが君はなんのためにこんなことをするのかね見たところ大人がいるようだがそいつらにまかせておかない」
「私が答えるとでも？」
「なら、私も君達の質問に答える必要は、無いな」
「くっ！私は、マギステルマギになるために目の前で起こった事件を見逃す訳には、いきませんそのために私は、ここにいます」
マギステルマギ・・・そうかこの世界は、以前来たか

となるとだいたいの魔法は知っているから不意を突かれる心配は、ないか
「マギステルマギになりたいとそうかでは、聞くが
一端武器をおろして敵意がないように見せているが遠くから狙うのは、マギステルマギのやることか」
「っ！？」
「結局君達が目指しているもの程度がしれるな」
周りが殺気立つそして
キィン！！
「口で勝てないと悟ると今度は、実力行使かね？つくづく愚かだな」
いつの間にか男の手には、白と黒の剣がにぎられていた
「な！？転送系の魔法ですか？」
「答えると思うかね？」
キィン！！
ｓｉｄｅ刹那
龍宮のことがバレたのは、驚きだがこの数を相手に勝てるつもりなのだろうか？　キィン！！
「なっ！？刀子さん」
キィンキィン！！
すごいあの人刀子さん相手に互角以上にわたりあってるそれにあの人の剣には才能が感じられない二流の剣だけどそれを極限まで鍛えることで一流とわたりあってる私は、その姿を見て美しいと感じてしまった
だかそれだけだ二流では、決して一流にはかなわないその証拠に今あの人に隙ができた。その隙を刀子さんが見逃すわけもなく絶対に回避できない打ち込みをする
これで詰みだ
キィン！！！
「「なっ！？」」
それは、剣を扱うものじゃなくてもわかる決定的な隙だったはずそ

こを打ち込まれたらそれで終わりだったじゃあなぜ倒れているのは、あの人じゃなく刀子さんなんだ！？

ｓｉｄｅ士郎

俺の剣は確かに二流どれだけ鍛えても一流にはなれないそれに俺の剣は、守りが主体だ守っているだけだと必ず負けるだからこそ一流を相手にしても負けないための技術をあみ出した

「まったく実力行使とは、君達が目指しているもののやることかね」

「くっ、おおーーー」

「遅い！！」

1人また1人と気絶させていく

＞私に触れぬ＜

「ノリ・メン・タンケン」

そうして残りは、４人だけとなった

「さて、まだやるかね？」

「君はなんのためにここに来た！」

マグダラの聖骸布で拘束された男が聞いてきた

「事故だと言えば信じてくれるのかね？」

「そんなの信じるわけがないでしょう！！　」

「黒衣の夜想曲！！」

黒き槍が士郎に向かって放たれた

「全投影連続層写」

＞ソードバレルフルオープン＜

ダンダンダンダンダン

それを士郎の剣群が主を守るべく槍を破壊していく

「この魔法もしかしてあなたは、あのサウザントマスター殺しの大悪人［剣の王］！！」

「その名前で呼ばれるのは久しぶりだなところでサウザントマスター殺しとは、なんだ？ナギが死んだのか！？」

「なにを言ってるんですかあなたがやったのでしょう！！」
「待て俺は、やってないナギが死んだのだって今知ったんだ話を聞かせてくれ」
「誰がそんな話を信じますか！」
ちっ冷静さを失って話してがつうじないな
とりあえず
「ドン！！」手刀で気絶させた「そこまでじゃ！！」
「やっとまともに話ができそうだな」と周りを警戒しながら動きを止めると
「エミヤ？」
ふいに名前を呼ばれた驚いた
「ん？なぜ私の名前を知っている？」
［剣の王］やその他いろいろな呼び名で呼ばれたが本名は、紅き翼の人達にしか話してないのになぜこの男が知っている？
「ボクだよタカミチだよ」
「タカミチ！？あのガトウの弟子の？」
「そう！そのタカミチだよ！！」
「タカミチ君知り合いかね？」
「はい、一時期だけ紅き翼にいたエミヤシロウです」
「もしやあの［剣の王］かね？」
「学園長その名で彼を呼ばないでください彼は世間が言うような悪人では、ありません」
「そうか、君がそこまで言うのじゃからそうなのじゃろうな」
「ところでエミヤ君この状況は、一体なんじゃねワシは、話し合うように言ったんじゃがのう」
「ああこれですか。これはそちらからさきに手をだしてきたので正当防衛ですよとところでタカミチ、ナギが死んだって言うのは本当か？」
するとタカミチは本当に申し訳ないような顔していた「公式発表ではそうなっているすまないエミヤ世間が勝手に君が殺したと決めつ

けてしまって本当は君が一番悲しいはずなのにね」
「いや、気にするな昔からそうだっただろその話しは、後で詳しくきかせてくれ」
「わかったよ学園長」
「うむ少し学園長室で話してをきかせてもらえるかの？」
「わかりました」
そう言って全ての投影したものを消していく
「それと刹那君と龍宮君と他の魔法先生達は、気絶したもの達を運んでくれ」
「「「「わかりました」」」」

「それでどうしてここ麻帆良学園にきたんじゃ」
「俺がここに来たのは事故のようなものです。」
「そうか、では管理人になぜ魔法かけたのかのぅ」
「あれは、戸籍がないためしかたなく魔法をつかいました。もちろんそれだけで家賃やその他のことは、守っています」
「では、最後に君はこの学園の敵かの？」
「時と場合によりますが基本的にこの学園の生徒に手をだすつもりは、ありませんし無関係な人を傷つけるのは、嫌いなことですから」
「そうかでは、君には戸籍を用意しておこうそれとこの学園に通ってもらおう」
「は？」なんでそうなる

「本気ですか？学園長」
「もちろんじゃ高畑君」
「エミヤもいいのかい？」
「別にいいんじゃないか？」後に士郎は、語るあの時俺は聞くべきだったんだ一体どこに通うことになるのかをと言ったそうな

第3章　新たな生活（後書き）

［士］
おい、作者まさか、あんた俺を女子中学校に通わせる気か？
［作］
うん♪
［士］
正気か！？あんた！！最初の予定では、俺は先生だっただろ！？なのになんで急に生徒なんだよ！？
［作］
先生か生徒か最後まで迷ってたんだけど期間限定で生徒なら大丈夫かなって
［フィ］
女子校そこに放り込まれる士郎→フラグ連発→モテモテ→私の怒りＭＡＸ
さてご主人さま懺悔の時間は、十分ですか

［士］
ま、待てフィリア俺まだ何もしてないよね！？しかも呼び方がいつもと違うぞ！？
や、やめ　　お前の銃は、殺傷能力高いだろシャレにならないぞ
ギャーーーーーー

外伝　士郎のいない日々（前書き）

今回は外伝です。

外伝　士郎のいない日々

現在凛とフィリアは衛宮邸にいた士郎がどこかの世界に飛ばされたことの報告のためであるもちろん家には、自分の信頼する従者と妹のさくらがいるが2人なら納得・・・はしないまでも言い含めることくらいはできるだろうと判断していた。しかしそれは後ろに控えているメイドのしたことを知っていれば、そんな判断はしなかったしすぐにでも逃走しただろう

結果的に言うとそこは真祖でさえも入りたくないと言いたくなるほどの魔境とかしていた

「さて、遠坂様士郎さまは一体どこに行ったのですか?」そこには、ガシャンと銃を構えたフィリアがいた

「クスクス姉さんったらそんなに食べられたかったんですか?」そこには黒くなったさくらがいた

「リン、正直に答えてくださいでないとたとえマスターと言えども私は容赦しません」そして私の信頼する従者は完全フル装備て私に

プレッシャーをかけてくる

「そうですね。士郎君のことを速くはいて下さいでないと・・・ひねりますよ」ダメット…もといバゼットがファイティングポーズをとってつめよってくる

遠坂　凛は、今かつてないほどヤバイ状態に陥っていた理由は単純フィリアがあらかじめみんなに士郎のことを伝え帰りの日程などの情報をリークしていたからである。

そうとは知らず凛が居間に入った瞬間現在に至る

「だ、誰か助けて」

そこへまさに神の使いが表れた

「ダメですよ。ダメット」

「か、カレン～」

今まで凛にとってこの瞬間彼女がこんなにも神々しく見えたことは、今までに無いだろう

凛はこのチャンスを機に誤解を解こうとした

いや、厳密には解こうとしかけたが正しいだろう

なぜならそこには、すでに悪魔が降臨していたのだから

「肉体的ダメージだけでは、生ぬるいです。精神的にもダメージをあたえないとダメですよ。」

しかしその神々しさが一瞬で禍々しい悪魔のように見えたのは言うまでもないだろう

「それで衛宮士郎はどこにいるのですか？」

「だから！私にもわからないって言ってるでしょ！！」ジ～～～～～

「う、何よ！いいじゃないのどうせここに居たって封印指定されて代行者たちに追われることになるんだから」

その言葉で一気に空気が重苦しくなった

「へ？・・・フィリアもしかしてみんなには…」

「士郎様が封印指定をうけたことは話していませんよ」

あちゃ～

「やっぱりそうなりましたか…」

「姉さん！どうして先輩を助けてくれなかったんですか」

「さくら様遠坂様は私達をできるだけ助けてくれました。それでもどうしようもなかったんです。」

わかっている封印指定をうけたら姉さんでもどうしようもないことくらいでも！　それでも！！

「そのへんにしておきなさいさくら」

「カレンさん？」

「あなたのお姉さんはなんでもできるわけではないのですよ。それでも衛宮士郎は、生きているんですよ。そのことに少しでも感謝したらどうですか？」

「そう・・・ですね」
「ごめんなさい姉さんそしてありがとう姉さん」
「ううんいいのよ私だってお礼を言われるようなことはしてないわ」
そう言って場空気をかえるため心を切り換える
「今日の夕御飯さくらが作ってちょうだい久々にさくらが作ったのが食べたいし」

一瞬キョトンして
「はい！！」
とても綺麗な笑顔で返事をした

夕食後凛は、縁側に座りながら少し昔のことを思い出していた

それは、聖杯戦争が終わりロンドンに士郎を誘ったときだ私はアイツに士郎を真人間にすると誓っただから私はそのことを士郎に話したでも・・・

「俺は遠坂とは一緒に行けない」
そう言われてしまった。

「ど、どうしてよ！？」

「もし俺が正義の味方をやめてしまったらアーチャーが救うはずだった人はどうなる？」

「！！」
それは考えないようにしていたことだった

そう士郎を真人間にするということは正義の味方をやめさせるということ
もしそれで、士郎が真人間になってしまったらどうだろう
それは未来の彼である英霊エミヤが救うはずだった多くの人を見殺しにすることになるのではないだろうか

「俺は、自分の幸せのために多くの人々を犠牲にすることはできない」
それは衛宮士郎にとって当然の答え

その果てが一を切り捨てるという結果になろうとも自分の掌で救える限りの人々を救う

この理想は、間違いなんかじゃないそれが彼の考え

「そう！それじゃあ勝手にしなさい！！」

そう言って彼とは、決別した。
しかし私もすこし気になって情報をあつめるとすごい人達の弟子になってたりしてあのときはすごく驚いたものだ
その他にも封印指定されないよう根回ししたり
あのときなんか大師父から宝石剣を借りて士郎のところにいった
本当は初めから平行世界におくるつもりだったのに
あいつの顔を見たらアイツそっくりになっていて
ムカついてしまってついやってしまった。

「今頃あいつなにしてんのかな～」

綺麗な満月の下

彼女はもうあえないであろう彼のことを思う

そしてまた彼のいない日々がおわりをつげた

外伝　士郎のいない日々（後書き）

次回は本編期間限定士郎の生徒としてのせいかつを書ければな～と思っていますフィリアは新学期から入れたいな！！

それでは作者・作品ともどもこれからもよろしくおねがいします

第４章　編入（前書き）

いろいろあり更新がおくれたことを深くお詫びします

第４章　編入

ｓｉｄｅネギ

「ふわ～～～～あ　そろそろあったかくなってきたねー」
眠そうな顔しながらこのかさん言ってきた。
「そうですね。このかさん」そろそろ春が近いな～などと考えていると
「二人ともしゃべってないで走りなさいよ遅刻するわよ！」とすこし呆れたふうに明日菜さんに言われた。
「ネギ君おっはよー！」
「やっほーーネギ先生！」

「あ　佐々木さんに和泉さん！」

「おはよーーー」

「こないだのドッジボールおもしろかったねー」

「スカッとしたわ」

「ハハハそうですね」
あのときは、弾みで魔法を使っちゃたけど今度やるときは、魔法使わないようにしなくちゃ
「おはよーネギ先生！」
「ネギ君おはよー！」
「あっ！おはようございます」
「オーッスネギぼーずー」
「オーッス」

みんなの挨拶うれしいな…なんか最近先生として受け入れられてるぽいし…
この分なら結構簡単に立派な魔法使いになれるかも…！？

「あっ！そうそうネギ君おじいちゃんが朝学園長室に来てって言ってたよ」
「わかりました。このかさん」
（それにしても一体なんだろう？）

ｓｉｄｅ士郎
今俺の目の前には、悪の根源たるぬらりひょんもとい学園長がいる。
「すまないもう一度言ってくれ学園長？」　とびっきりの笑顔で質問する。
「な、何って士郎を学園に編入させると」

「あぁそこまでは、いいだがそのあとだ！！なぜ俺が女子校に編入しなければならない！！」

「じゃって面白そうじゃたんだもん」
ブチ
「ん？何の音じギャー」
投影するのは、お仕置き専用兵器［虎竹刀］
「いくぞ学園長昇天する覚悟は十分か」
「ま、待ってくれ話せばわかる話せばギャーーー」
悪霊撲滅完了
コンコン

ん？
「失礼します。学園長先生は、いらっしゃいますか？」そこには、十歳くらいの男の子がいた。

「学園長先生！一体どうしたんですか！？」
「フォフォフォ大丈夫じゃよ朝早くすまんかったのネギ君」
頭から血を流しながら言っても説得力ないぞ学園長
「実は君に紹介したい人がおってな」と一度区切りこちらに視線をむけてくる。「今日から新しく君の生徒となる衛宮士郎君じゃ」
ん？生徒
「学園長まさかとは思うがこの子は」
「麻帆良学園中等部２―Ａ担任つまり君の担任になる
ネギスプリングフィールド君じゃ」

・・・なんでさ！？
「学園長…それは、犯罪だろ！？」
しかしこの学園長に常識など通じるわけもなく
「犯罪というのはバレなきゃ犯罪ではないんじゃよ」　などと言いやがった
「えと、あの…」
ネギ君も状況についてこれていないみたいだな。
「はぁ～～よろしくなネギ君」

「え！あ、はい！よろしくお願いします！」

「それとシロウ君」
学園長が小さな声で話かけてくる
「ネギ君は、こちら側の人間じゃからできるだけサポートしてやってくれんかの」

「わかりました。」
「それでは、ネギ君シロウ君を頼むぞ」
「はい！それじゃあいきましょうシロウさん」

「というわけで今日から同じクラスで勉強することになった衛宮士郎君です。皆さん仲良くしてください！それじゃあ士郎さん自己紹介お願いします。」

「今日から同じクラスで勉強させてもらうことになった衛宮士郎です。趣味は、がらくたいじり特技は、家事全般あと喫茶店を午後から開いているのでぜひ来てほしい」

「「「か」」」

（カリバーン？）

「「「かっこいい！！」」」

「どっからきたの！？」
「何人？」
「喫茶店てどこでやってるの？」
（いや、おかしいだろ！？なんで男が女子校に転校してくんだよ！？）

「いいかげんになさい！！」
（助かっ）
「順番に聞いていきましょう」
（てなかった～～！）
「どこから来たの？」
「ロンドン」
「何人？」
「こんな顔してるがれっきとした日本人だ」
「なぜ女子校に？」
「学園長に、はめられた」
などなど質問に答えっていった
「それじゃあ士郎さんの席は～一番後ろのエヴァンジェリンさんのとなりです。」

「わかった」
（自分の席に向かうだけでこんなに警戒されたのは、はじめてだな～）
今シロウは現在進行形で刹那と龍宮には警戒されまくっているそれだけでは、なく中国人ぽい人やら糸目の人には違った視線を向けられていた。
「よろしくエヴァンジェリンさん」
「貴様何者だ？」

「いや、何者って言われても衛宮士郎としかいいようがないな」

（エミヤシロウ…どこかで聞いた名だ後で茶々丸にでも調べさせるか）

「それじゃあ授業をはじめます！」

こうして衛宮士郎の学園生活がはじまった。

「ありがとうございました～」

あのあと特に問題もなく俺は、喫茶店で仕事をしていた。

「ふ～今の人で最後か」

客も最初に比べたら徐々にではあるが増えてきていたカランカラン

「すいませんもう店じまいなんで…って明日菜かどうした」

「図書館島に行くからあんたもいくわよ！！」

「は？」

ザッ

バカレッド！

バカブルー！

バカイエロー！
バカピンク！
バカブラック！
5人揃って
「バカレンジャー＋2」
その他シェルパ&地下連絡員

「これが図書館島か」

「でも・・大丈夫かなー下の階は中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップとかあるらしいけど・・」

「なんで図書館にそんなものが…「ええ～～～～！？」ん？」
「どうしたアスナ？」
「なんでもないわよ～」
「そ、そうか」
「それじゃあ行くです」

ギギィィィ…ゴォォン…
「なあ、綾瀬」
「夕映でいいです。それでなんですか？」

「この図書館島ってどんなところなんだ？」
「この図書館島は、明治中頃学園創立とともに建設された世界でも最大規模の巨大図書館です。」
（まぁ確かに図書館というより図書館島っていうほうがあってるなこの大きさは）
「ここには二度の大戦中戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書があつめられました。蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返され――現在では、その全貌を知るものはいなくなってい

ます。」
「そこで　これを調査するために麻帆良大学の提唱で発足したのが――――――私たち麻帆良学園図書館探検部なのです！」
「うあ～～～っ」
「わーっ本がいっぱいホントにすごいぞ！！」
「ホントだなこんなデカイ図書館なんてはじめて見たぞ！！」
それから俺たちは、どんどん先に進んでいった。
「うひゃ～広ーッ」
「わー本棚の上を歩くんですか？」
「何考えて作ったんやろねホント」
「まったくだ昔の人たちは本棚の使いかたを知らなかったんじゃないかと疑いたくなるな」
「ごめんな～シロウ、アスナが無理やりつれてきたみたいで」
「いや気にしないでくれ俺も楽しんでるしアスナには感謝してるくらいだから」
「そう？ほならよかった。」
「ところでなんで急にこんなところに？」
「なんかな～ウワサなんやけど次の期末で最下位を取ったクラスは解散らしいんよ」
「解散？」
（確かにあの学園長ならやろうと思えばやるだろうな～ん？でもまてよ）
「それとここに来るのはどんな関係が？」
「なんかなこの図書館島の深部になよめば頭のよくなる魔法の本があるらしいんよ」
「なるほどな」

たしかに魔法の本の一つや二つあってもおかしくはないが…

バコン
「えっ」
「さっ佐々木さん！？」
「佐々木！！」
「キャーッ」
「強化開始！」
間に合うか！？
「えいっ」
しゅるっ
ビンッ！
「は？」
「あわわわびっくりしたー」「「おおお！？」」
すごいな純粋なリボンであんなことができるなんて・・・いや佐々木以外できない気がする
「本棚が！？」
「ハイヤーッ」
おおっ

バラバラ
「あう～本の雪崩だ～」
パシパシパシパシパシパシ「ほいほいほい」
「ハイ時間がないからさっさと進みますよ～」
「まあ私たち成績悪いかわりに運動神経いいアルから」
「大丈夫でござるよ」
「ではこの先に休めるところがあるのでお弁当にしましょう」

「お～」
「待ってたあるよー」

「さてと食べるか」
じーーーー
「・・・・・・」
じーーーーーーーーー
「食べるかこのか」
「うん！　いただきます」
「美味しいな～」
「あ！このか1人でシロウの弁当食べるなんてずるいわよシロウ！
私も食べてもいいでしょ！」
「あ、あぁいいぞ」
「やったーいただきます～」
「美味しいーー」
「どれどれ」
「うまいアルな」
「これはシロウさんが作ったのですか？」
「そうだけど口にあわなかったか？」
「いえとても美味しいです」
「そうかよかった」

そうしてその後も弁当をみんなで分けながら食べた。

「ほなそろそろ行くえー」

ゴォォォォ…
「ひえーっ」
「死ぬっ・・死んじゃうよーっ」
「あーんもうイヤー」
「服ボロボロー」
「こんなところにある本なんて誰が読むのよー！？」
「夕映けっこう燃えてるやろ」
「わかります？」
（いつもと同じ表情に見えるんだけど）
「この区域には大学部の先輩もなかなか到達できません中等部では私たちがはじめてでしょう…」
「ここまで来れたのはバカレンジャーの皆さんの運動能力のたまものです。」
「おめでとうです。さあこの上に目的の本がありますよ」

「あ…」
「す、すすすごすぎるーっ」「私こーゆーの見たことあるよ弟のPSで」
「ラスボスの間だな」
「あ…あれは！？伝説のメルキセデクの書ですよ！！」
「てことは本物…？」
「本物もなにも最高の魔法書ですよ。これならちょっと頭をよくするくらい簡単かも」

いやネギ君よ驚いたのは、わかるがあまり魔法書とか魔法とか一般人の前で言ってはダメだろう

キュピーン

「ん？」
「どうしたんシロウ？」
「いや今石像の目が光ったような・・・」
「これで最下位脱出よーー」
「おい！そんな貴重な本あるんだからワナがあるだろ！」
「そうですよ！」
「気をつけて！！」
ガコン！
バカンッ
「「「きゃー」」」
「ネギ、このか」
二人をなんとかキャッチする
「大丈夫か？」
「うちは大丈夫」
「ぼくも大丈夫です。」

「え…な何これ」
これはツイスターゲーム？

「フォフォフォフォ」
ブウーン
ゴゴゴ…
「この本が欲しくばわしの質問に答えるのじゃーフォフォ」
「石像が動いたーっ！？」
「おおおお！？」
この声は、
「おい、何してるんだ学園長」
俺は、もう一体のゴーレムに話かけた。
ギクッ！
「わ、ワシは学園長ではないた、ただの番人じゃ」

はぁ～魔法を秘匿するつもりは、あるんだろうかこの人？
「怪我だけはさせるなよ」
「わかっとる孫もいるんじゃからあまり無茶はせんよ」
「ならいいけど」

「それでは、最後問題じゃ［ＤＩＳｈ］の日本語訳は？」

「え…ディッシュ？」
「ほら食べるやつ！食器の・・・」
「メインディッシュとかゆーやろー」
「食べ物をのせるやつだ」

「わかった！［おさら］ね」
「お」
「さ」
「ら」

「・・・おさる？」
「ちがうアルよー」
「ハズレじゃなフォフォ」
バカン！！
「アスナのおさるー！！」

「いやぁぁぁぁ～～～～」

「アスナ！ネギを頼む長瀬は夕映をクーフェイは佐々木を頼む！」
「わかったわ」
「任せるアル」

「了解でござる」
「このか！つかまれ」
「うん！」

ゴォォォォォォォ
ザッパーーーン

第４章　編入（後書き）

［作者］
はぁ～短編小説つくりて～［フィ］
どうしたんですか？急に？［士］
フィリアこの人が急じゃなかったことなんてあるか？［フィ］
それもそうですね
じゃ無視する方向で
［作者］
いや聞いてよ！？
実はさ今やってるゲームに士郎に持たせたい剣があるわけよ！
どのみちネギは原作で強くなるからいいけど士郎にもっと強くなってもらいたいし俺のもうひとつの小説とからめるかんじでいきたいな～とかいろいろ悩んでるんだよ！

［フィ］
それより早く私をだしてください
［作者］
ああ～そんときはカレンも一緒にこっちの世界に呼ぼうと思ってるから頑張ってね士郎
［士］
勘弁してください

第5章　最終試験（前書き）

時間かかったわりには駄文ですのですいませんでした

第5章　最終試験

人の命には限りがある

それをどう使うかは、その人しだい

多くのものは、自らのために使うものだ

そして一握りの人々は、他者のために使う

しかしそれにまったく下心が無いものなどいないだろう

何かしらの報酬それによって、また頑張ろうと思えるのだろう

しかしここにいるのは、他者を救うために自らの命を賭けてる男

下心の無いまったくの善意それゆえ他者から不信に思われる

全てを救うべく戦ったその男への報酬は、裏切りと絶望

まったくバカげた話だ
テレビやマンガの世界でも全てを救うことなど叶わないと

ほんの少しの人が死んでも敵さえ倒せばハッピーエンドとなる

全てを救う方法など存在しない

しかしこの男は、全てを救うために多くのものを失った

1を切り捨て9を救う
この行動は、正義の味方として最善の方法もちろんこの男もその方法をとった

それを正義だと思えば楽だっただろうしかしその男が目指したのは、全てを救う正義の味方

誰も死なずに救う1を切り捨てずに10を救う

あぁそれができたらどれだけ幸せだろうか

ある時小さな少年が聞いたどうして大人になると人を助けられないの？と子供は、できるのにどうして大人はできないのと

簡単だ大人になると誰も助けては、くれないそれゆえ自らでなんとかしなければならないその点子供は大人たちに守られている責任も大人が全てとるだから守られているものが守られているものを助けられるのは当然だ

守られていることに気がつかない子供は、大人に失望するそして大人になるにつれ現実に絶望する

しかし例外も確かにある守るべき大人が子供を傷つけることもある

自らの欲望のために他者を殺したり

守ってくれていた大人をつまらぬ理由で殺したり

悲しきことよ
人はこの世全ての悪と言っても過言ではない
人は醜いと滅びてしまえばいいと考える人もいる
しかしこの男はその醜さを知ってなお人を救いたいと願う
多くの人が幸せになって欲しいと祈って彼は、今日も剣を手にする

「あれ…ここどこや？」

「起きたか」

「あっシロウ庇ってくれてありがとうな」

「うんいやそれはいいんだけど…」

「ん？」

「降りてくれないか？」

今俺の上にこのかが覆い被さるよな形になっている状態である

「へ？～～～～～！？」

そしてこのかもやっと気がついたのか顔を真っ赤にしながらすばやく降りた

「あれシロウさん？・・・そ、そうだ僕たち英単語のトラップを間違えてゴーレムに落とされちゃったんだ…」

「・・・・ってここどこなの～～～～！？」

「・・・ここは幻の【地底図書室】」

「なんやそれ夕映？」

「地底なのにあたたかい光に満ちて数々の貴重品質にあふれた本好きにとってはまさに楽園という幻の図書館…」

へ～～ライダーがいれば見せてあげたかったな

「しかしこの図書館を見て生きて帰った者はいないとか」

「え――――――っ！？」

「いやそれならなんで夕映が知ってるのさ」

「うっ・・・しかし脱出困難であることは確かです。」

「どうするアルか？それでは明後日の期末テストまでに帰れないアルよ！」

「それどころか私達このまま　おうちに帰れないんじゃ・・・？」

「あの石像みたいのもまたでるかもだし」

「み、皆さん落ち着いて！」「そうだまだ帰れないと決まったわけじゃないんだから」

「み皆さん元気をだしてくださいっ　根拠はないけどきっとすぐにかえれますよ！　あきらめないで期末にむけて勉強して起きましょう！！」

「え…勉強～！？」

「アハハハハこの状況で勉強アルか！？」

「は、はいきっとすぐに出られますから」

「そうだなじゃあご飯については俺にまかせろ」

「やった～シロウのご飯食べ放題や～」

「それじゃあ皆さん頑張りましょう！」

「「「おー！」」」

次の朝みんながまだ寝ているうちに鍛練することにした。干将・莫耶を投影しダラリと手を下げる想像するのは最速のサーヴァントランサーだ彼の戦いかたは槍のリーチの長さを活かしたら中距離が得意その一突きはまさに必殺

「さてでは、はじめようかランサー？」

ｓｉｄｅ楓

あの歩き方から只者ではないと思ったでござるが同じ歳でここ実力が離れてるとは思っても見なかったでござる

「クーフェイはシロウ殿をどう思う？」

「敵では無いと思うヨ　ただ…手合わせしてもらいたいね」
クーフェイも同じでござるかこんなみじかに自分たちより上の人とがいるのだから手合わせしたくてうずうずするでござる

「では、さっそく行くでごー」
ザクッ！

「！」

「うわ！？」

いきなり後ろの木に剣が刺さっていた

ｓｉｄｅ士郎

人の気配を感じたので威嚇するつもりで剣を投げたんだが・・・

ガサガサッ

茂みの中から二人出てきた「う～危ないアルよ～」

「気づかれてないと思ってたでござるがまだまだ拙者も修業が必要

でござるな」
「なんだ楓とクーフェイか脅かすなよ」
「驚いたのはこっちアル！！危うく剣が刺さるかと思ったネ！！」
「む、それは悪かった。すまん」
「気にしなくていいでござるよこちらの自業自得でござるから」
「ありがとう」
「それでシロウ殿一つたずねるでござるがシロウ殿は拙者らに危害をくらえる者でござるか？」
「こちらに危害を加えない限り何もしないしそもそも無関係な人を傷つけることは嫌いだからな」
「そうでござるか」
その答えに満足したのかその場の緊張感が消えていった
「では朝ご飯楽しみにしてるでござる」
「おいしいのを頼むアル！」
「おう任せとけ」
そして二人はみんなのところに戻っていった
「約束したし今日の朝食は気合いいれるか」

一方学園では

「え…え～～～なんですって！？２Ａが最下位脱出しないとネギ先生がクビに～～～！？」

「とにかく皆さん！テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ！！わからないことがあったら私たちに聞いてくださいそれと超さんに葉加瀬さん期末テストの予想問題を作ってもらえますか？」

「ＯＫね！」

「しかたないですね」

「他の方々も協力してください」

「これだけあれば十分だろう　　さてそろそろ出てきたらどうだ学園長？」

「フォフォフォやはり気がついておったか」

「学園長あなたは確か孫もいるから無茶はしないと言ってなかったか」

今のシロウをみたら背景にゴゴゴゴという文字を入れたくなるだろう実際それくらいの怒気を孕んでいろのだが

「ちょっと待つのじゃシロウ君歳よりを虐めるきか？」

「何言ってるあんたは今ゴーレムだろなら関係ないだろ」

「い、いやちょっと待つのじゃそ、そうじゃ出口を教えるからそれで勘弁してくれんかの？」

「・・・わかったそれで出口はどこにあるんだ」

「滝の裏に非常口があるそこを上にいけば地上に出られる」

よしそれじゃあさっそくみんなに教えるか

「ん？誰もいない」

「キャーーーーー」

あの声はまきえ！？

まさかまた学園長か？
念のためみんなの荷物を持っていくか
そうして俺は足に強化をかけ急いで向かった

「き、キャーネギ君助けてー」
フォフォフォ

な！？まきえなんて格好してるんだ！？

「ぼぼ、僕の生徒をいじめたな！いくらゴーレムでも許さないぞ」

「ラス・テル・マ・スキル　くらえ魔法の矢！！」

し～ん

「ま…」

「まほーのや…？」

ネギ君…君は本当に魔法秘匿する気があるのか心配になってきたよ

「フォフォフォここからは出られんぞ迷宮を歩いて帰ると3日はかかるしのう～」

「3日!?」

「それではテストに間に合わないアル」

「み、みんなあきらめないで僕の魔法の杖で飛んでいけば一瞬だから…ハッ!?」

はぁ〜

「こ、こらネギさっかから何モロに言ってるのよ!?」

「まほーののつえ?・・・」

「キャーッ何でもない何でもない」

遠坂のうっかりなみだな

「みんなさっき滝の裏に非常口があるのを見つけた」

「それよ!!」

「ん…?あ!!みんなあのゴーレムの首のところを見るです!」

「あっ!あれはメル・・・何とかの魔法の書!?」

「本をいただきます!まきえさんクーフェイさん楓さん!」

「「OK!バカリーダー」」

「ハイ!!」

ド　ン　!!

「フォ!?」

「よ」

「やっ！」

見事な連携で本とまきえを奪うことに成功した。
てかまきえリボンでそんなことできてしまうお前は一体どうなってるんだ？

走る走るひたすら走る走る走る走る走る走る夕映を背負って走る走る走る走る走る

「ハァヒィ…もう一時間は登ってるよ～へとへと」
「一体いつまで続くのよ～」
え～今の状況をつかめていない人には状況を簡単に説明しよう
あの後非常口を見つけて中まで入ったのまではよかったのだが
そこにあったのはらせん階段だ
別にらせん階段くらい大丈夫だろって？

いやいや君たちが想像してるのはおしゃれならせん階段だろうが残念ながら俺たちが登っているのは

なんの飾りけのない

長いらせん階段だ

それも一時間かけて走りながら登ってもまだ先がある階段だぞ！？

それに続いていちいち階段を昇るのに問題を解いていかなければならいというサプライズつき

途中で夕映が木の根に引っ掛かり足をくじいてしまいネギ君が運ぼうとしたがさすがに無理で俺が運ぶことにした。

そのさい夕映が顔赤らめていたことには、気がつかないのは士郎固有スキルだろう

「あ！携帯の電波が入りました！！地上は近いです。助けを呼ぶのでみなさんがんばって！」

「ち…地上が・・・！？」

「ああっ！みんな見て下さい地上への直通のエレベーターですよっ」

「これで地上に帰れるの！？」

「みんな急いで乗って乗ってーーーっ」

「きゃー早く早く」

「よーし乗った！！」

「地上一階へＧＯ！！」

ピン♪

ブブーーーッ

――重量ＯＶＥＲデス

（（（いっ…いゃあああーっ））））

「みんか持ってるモノとか服を捨てて！！ほら見て片足だすだけでブザーが止まる…あとちょっとなのよ！」

「おお脱ぐアル脱いで軽くするアルよ！」

「いやまて俺がいることは無視か！？一応俺は男だぞ！？」

「・・・・・・えいっ！やけくそよ～士郎あとで一発殴らせなさい！」

「そんな理不尽な！？」

「これでどうアル！？」

そして続々と服を脱いでいく精神衛生上よろしくない！！

ゾクッ

なんか悪寒が

あっ目を閉じればフィリアが銃を構えているよ～

ダダダダ！

はっ！なにか俺は見てはいけないものを見てしまった・・・忘れよう

「やっぱりダメアルー」

「もう捨てるものないよ～っ」

「あとちょっとなのにー」

「フォフォフォ追い詰めたぞよー」

「キャーッ」

「・・・・・・・・・」

「ネギ！？」

「僕が降ります！！みなさんは先に行って明日の期末を受けてください！！」

「えっ！」

「ネギあんた魔法が・・・」

（生徒を守るんだ！！たとえ魔法が使えなくても僕は先生なんだか

ら！！）

「ゴーレムめ！僕が相手だ」

「ネギくーん」

「ネギ坊主！」

「フォフォいい度胸じゃくらえーい」

「アスナこの本借りるぞ」

「え？シロウ？」

ぐいっ

「フォ！？」

「し・・・シロウ？」

「確かに今の行動は立派だったがこの期末は君が先生になれるかどうかの試験だろ？なのにネギがいないまま試験受けても意味がないだろ？」

「でもどうするんですか？このままじゃゴーレムに…」

「俺が降りよう」

「え！？」

「シロウ君？」

「シロウ…」

「それじゃあシロウが！」

「ネギ、君たちが先に逃げてくれれば俺も逃げられるだから大丈夫だ」

「・・・シロウいいの？」

「ああ」

「シロウごめ――」

「ああそれとアスナ」

「え？」

「時間を稼ぐのはいいが――」

「別にアレを倒してしまっても構わんのだろう？」

「！？・・・・・・えぇさっさとそんなヤツ倒して早く帰って来て一発殴らせなさいよ！」

「やれやれでは期待に応えるとしよう」

「シロウ・・・」

「ネギ安心しろ魔法の本が無くったって彼女らならできる。だから

ネギができることは信じることとだけだろ？ならせめてそのひとつだけでもやりとげてみせろ！！彼女らがしたことは決して無駄ではないのだから」

「うん！」

そして扉がしまる

「行ったか…」

「フォフォフォ役者じゃのうシロウ君」

「・・・学園長すまない」

「なにがじゃ？」

「アスナと約束したからあんたには地獄に落ちてもらう！」

バコン！！

「フォ…フォ〜〜〜〜〜〜！？」

――――――――――――――――

結果的に言えばなんと2Aがトップになった。

最初は学園長のミスで順位が最下位だったのが一気に学年一位となったのだ
ちなみに学園長がミスしたことは貼り出すように指示したのは俺である

（これくらいですんでラッキーだろ？学園長）

一方学園長室ではグルグル巻きで頭にタンコブを作った学園長が発見されたという
ちなみに学園長のねらいはネギの最終課題とともにシロウへの評価の最終的判断するための試験であったことは内緒だ

第5章　最終試験（後書き）

［フィ］
フフフ別にいいんですよ
シロウさん私全然気にしてませんから
だから作者さんはやく本編に早く私を出してください？
［作者］
は、はい！？わかりました。やられていただきます。次の話で出させていただきます。それとカレンはだすかどうかは迷っているので意見くださいもう1つのサイトでもアンケートとってるのでどうなるかわかりませんが

第6章　再開（前書き）

内容がうすく文章力がない駄文という意見があり確かにな～と感じました。
今後も読みやすくなるようにより一層精進します

第6章　再開

ｓｉｄｅタカミチ
「どうですか学園長彼は信用できない人でしたか？」
「フォフォフォいや性格実力とも信用するにたる」

「そうですかそれはよかった」

「しかし見たところ彼は噂とは全然違うみたいじゃのう」

それはそうでしょうね彼がやってきたことは何ひとつ評価されず変な噂だけがひとり歩きしているのだから
「学園長それは前にも言いましたが彼は悪い人ではありません世間が勝手に彼に恐怖し勝手に悪人扱いしただけです。」

「しかしナギを殺せたのは当時彼くらいじゃろう？」
「学園長彼は絶対に殺していないし絶対に不可能なんです」
何故なら彼はあのときこの世界には居なかったのだから

「フォそれは何故じゃ？」

「それは・・・言えません」
本当は、彼が並行世界から来たことはすぐにでもいいたかったそうすれば彼の疑いがはれるからだけど言えなかった。
　彼と約束したからその約束は破れない
だけどもし、もしもそのことを話て疑惑をはらしたところで彼の力を狙ってくる人がでてくるだろうし本国ではどのみち彼は悪として誰かに憎まれ誰かに出会っても名をつげることができないし長居することができない

本国の人々はシロウに救われたことも知らずに彼を憎む
救ったはずの人々に憎まれる

あまりにも悲しい結果

もういいだろう
彼は充分すぎるくらい人を救ってきた

充分すぎるくらい傷ついた
充分すぎるくらい裏切られた

この世界に来たとき傷ついていた理由くらいだ
いたい検討がつく

もう彼は幸せになってもいいだろう

もう誰かのために傷つく必要はない

彼には静かな平和日常をおって欲しいと心からねがう
「・・・・・いずれ彼から聞いてください」

「いい難いことを聞いてすまんかったのぅワシとしても短い間じゃが彼の優しさはわかっているつもりじゃよ」

「ありがとうございます」

「それでは彼には正式にこの学校の先生になって貰おうかの」

ｓｉｄｅ　シロウ

「失礼します学園長」

「来たか入りたまえ」

「なんでしょうか学園長？」

「うむ君には正式にこの学園の先生になって貰うことにした」

「はっ！？いやなんでさ俺教員免許なんかもってないですよ！」

「そこは安心せいテストは満点合格じゃから」

「え？これは期末の…中学生にしては、やけに難しいと思ったらやっぱりそうゆうことか！」

「フォフォフォはい教員免許証じゃ　それと今晩世界樹の前に集合じゃ
だいたいの魔法先生達は知ってると思うが一応知らない先生もいるから挨拶してもらうぞ」

「了解した地獄に落ちろ学園長」

「フォフォフォフォフォ」

そしてその夜

「え～もうだいたいわかっとると思うが今日から新しくこの学校に勤務すること衛宮士郎君じゃ」

「えっと」

うわ～敵意がビシビシ伝わってくるな～特に前戦った先生たちからは殺意すら感じる

「ここで勤務することになった衛宮士郎です。よろしく」

「話かたが前とは違うのですね？」

「ええ俺は戦闘時と普通の会話のときと使い分けしてるんです。ちなみにこれが素のしゃべり方です」

ｓｉｄｅ　龍宮

「この前会ったときとずいぶんと雰囲気が違うな」

「そうだな、だけど油断はできない」

いかに雰囲気が良くなったとしてもあの数の魔法先生達をひとりで圧倒したことを考えると油断などできるはずかない

「クラスで見た限り信用できると思うぞ？」

「演技という可能性もある」
確かにその通りだがそれは、ないと龍宮は確信していた。
（あの不器用さまるであいつに似ている）
それは共に戦場を駆け抜けた相棒と呼べる存在
（血生臭い日々だったが充実もしていたな）
しかし突然そんな日々も終わりをつげた

（くっ・・・あの時私が…）

「お…たつ…」
あいつ衛宮士郎も同じ匂いがする
「おい…みや」
戦場の匂いあの目きっとあいつも大切な何かを戦場に置き去りにして来たのだろう
「おい龍宮！！」

「え？あ、どうした？」

「どうしたじゃない急に黙りこむから心配したじゃないか　何かあったのか？」

「いや何もないさただ考えごとをしていただけさ」

「そうか？ならいいんだが」
いずれ聞かなければ

何故戦場にたったのか

戦いの果てになにを見つけたのかを

ｓｉｄｅ　シロウ

「えっと終わりでいいですか？学園長？」

「うむそうじゃなそれじゃ解さ…」

ブォ――――――――！！

「なんじゃ！？あの光りは！？」

「あれは！？衛宮さんが来た時と同じ光り」

なんだと！？てことは、俺の知る誰かが来ている可能性があるってことか？

「龍宮さんと桜咲さんが交戦状態のようです！すぐに向かいましょう！！」

あの二人いつのまに！？

「行くよシロウ！！」

「了解！！」

ｓｉｄｅ　フィリア

シロウさんに会えますように
シロウさんに会えますように
シロウさんに会えますように！！

「それではいくぞフィリア」
「お願いしますゼルレッチ様」

ブォン

シロウさんに会えますように
シロウさんに会えますように
シロウさんに会えますよう――！？着いた

「キサマ何者だ！？」

いきなり戦闘！？
「え！？いや、あのその」
しまった素が出てしまった冷静に冷静に
「失礼いたしました。私はフィリアと申します。」
「なぜこの学園に侵入してきた？」
そう言って少女は刀をかまえた
「すみません私としては、現在の状況はわかりかねますが敵対の意思はありません」
しかし一向に構えを解かない　まあ当然ですよね
「仕方ないですね」
そう言って私は蔵から銃を取り出した。

ｓｉｄｅ　刹那

「仕方ないですね」
そう言って侵入者の背後の空間が歪む
その現象に驚き対応が遅れた。
「ちっ！！」
そして少し遅れて私は侵入者に斬りかかった。
ガキン！！
しかしそれは突如現れた剣郡に防がれた

「くっ！！」

ダンダン！

「銃使いか！！しかし神鳴流に飛び道具は効かない！」
そう言って弾丸を真っ二つに切り裂き侵入者に切りかかる

ボォン！！

しかし切り裂いたはずの弾丸が爆発した

ｓｉｄｅ　フィリア

【ファイアブレッド】
フィリアが所有する魔弾のなかで下位の弾丸
この弾丸に当たるとその拍子に軽い爆発を起こす
その他にも下位の弾丸にはシルバーブレッドやゴールドブレッドなどがある

今ファイアブレッドが爆発して煙が出ている

「今のうちに【シルバーブレッド】！ハッ！」

カキンカキン

「なっ！？足が凍っている　くっ！！動けない！？」

ダンダン

続いて夕凪と右腕までもが氷ずけに

「マズイ！？」

トン！

「あっ」

そうして刹那の意識はそこで途絶えた

ｓｉｄｅ　龍宮

「あいつこちらにも気づいてわざと煙をだしたな！くそ！こちらからは何も見えん！！」

はやくはれろ　はれろ！！

「よし！」

やっと煙がはれてスコープを覗くとそこには倒れた刹那しか居なかった

「くそどこだ！どこだ！」

落ち着け冷静になれ！

まだ遠くには行ってないはずだ！

探せ

「見つけ——」

ダン！！！

それはスコープごしの対面それはスナイパーにとっては死を意味する

ｓｉｄｅフィリア

気配遮断の礼装を使っても場所を特定されたのは驚きました。

後少し見つかるのが早ければやられていたでしょう

「安心してくださいい麻酔弾ですから、まあもう聞こえないでしょう

が」
その目はまさに戦闘者
数多くの修羅場をくぐり抜け時にはシロウをお仕置きしている時の
絶対零度の視線だった

私が勝てたのは単に奇襲が成功したからでしょう
これがもし能力がバレていての戦いだったら良くて引き分けか悪くて負けだっただろうしかし実戦において勝つための基本は、相手に実力を発揮させないこと

そうやってシロウさんと私は数多くの危機を退けてきたため私は、初めての相手に対する奇襲はお手のものです

「さあシロウさんを探さないと」
そして私を心配させたお仕置きをしないと
と小さな声で呟く
その姿はとても綺麗だった

ｓｉｄｅ　シロウ

俺は今タカミチと共に先に侵入者を追った刹那と龍宮を探していた

（刹那な無事でいてくれ！）

見つけた！

そこには、夕凪を握ったまま倒れている刹那がいた

「刹那！大丈夫か！？」

「シロ・・・ウさん？」

「ああそうだ！龍宮はどうした？それに侵入者は？」

「龍宮はあそこに

侵入者は誰か探しているみたいであっちの方に行きました。」

「わかった刹那は休んでろ俺は侵入者を追ってくる」

そして俺がその場所から去ろうとしたら

くいっ　と服をつかまれた

「どうした？」

「気をつけて下さい侵入者はどこからともなく剣を出して弾丸は急に爆発したり凍ったりします」

「へ？」
なんかその戦いかたに見覚えが……フィリア？
いやいやないない！
いやでも…
なんか滝のような汗が…
それに俺の直感（女性とのトラブルの時のみ発動する）がフィリアだと告げている

「シロウさん？」

「……」

「どうしましたシロウさん？」

「へ？いやなんでもないよぉはは…」

マズイ！非常ににマズイ！多分フィリアは大変ご立腹だろうそこにノコノコと他の魔法先生が行ったら…

「タカミチ！あそこで龍宮が気絶してるらしいからそっちに向かってくれ！俺は侵入者を追う」
「わかった気をつけて」

「ああ！」
急げこれ以上フィリアを怒らせないために
あったらすぐに土下座がベストだろうなぜ怒ってるかわからないが
…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

あそこからまだ遠くに行ってないはずだから多分ここらへんにいるはず

ドサッ！

「？」

「……」

「……」

「な……んで」

「どうして、どうしてシロウさんが……」

「・・・夢か」

「……まさか」

「え、となぜここに？」

「い、いやだ、私ったら、幻なんて……」

「へ？」

「シロウさんは、私の目の前にいるはずがなくて…」

「いや、ここにいるけど」

「……。」

「衛宮士郎はちゃんとここにいる」
「……本当に？…本当なんですね？」
「ああ、あのあとここで暮らしてる」
「また、お世話になる」
「お世話って……」
「もういなくなったり……しないんですか？」
「ああ」
「ずっといるんですか？」
「ああ」
「……」
「これからもよろしく頼む」
「ぁ……あ……ふぇ……う……うぅ……」
「フィリア！？」
なぜかフィリアは泣いていた。
「ごめんなさいごめんなさい……もう会えないかと思っててて…ぐす」
そうしてしばらくフィリアは泣いていた

「もう大丈夫です」

「そうかでもどうやってここに？」

「そ、それはそのゼルレッチ様にお願いしてというか賞品というか」

「はい？」

「と、とにかくシロウさん！」

「うん？」

「私をこれだけ心配させたのですから当然お仕置きの準備は万全ですよね？」

ニコニコ

うん普段の調子を取り戻したのはよかったけど今度は俺の命が危なくなったぞ～ははとにかく当初の計画どおりに土下座を―

「土下座しても駄目ですよご主人様？」

ゾクッ！

マズイ！まさかのデットエンド！？誰かこの状況を打破してくれる勇者は、いないのか！？

「お～いシロウ」

勇者だ！？勇者が来たいやもうかれは救世主だ！
「大丈夫かいシロウ？」
「ああ、たった今命の危機を救われた」
「？そうかい？それはよかったけどそこの人は？」
「ああ侵入者もとい俺のなか―「メイドです」のフィリアだ」
「はじめましてフィリアです。先ほどの騒ぎは失礼しました。」
「いえいえこちらこそ、それじゃあシロウ学園長のところに説明しに行こう」
「ああそうだな　それとフィリア」
「はい？」
「学園長はぬらりひょんみたいだが一応人間だから銃は使うなよ」
「わかりました」

余談ではあるが
結局学園長を見たときにフィリアが危うく引き金を引きそうになっ

たのをシロウがあわてて止めたそうな……

第6章　再開（後書き）

［作者］
今回のフィリアのセリフはとあるゲームのセリフから頂きました。
そのシーンは好きだったので使わせて頂きましたがなんのゲームかわかる人もいて気に食わないという人もいるでしょうが…そのゲームは、かなり好きなのでバカにしてるつもりはありません！

［フィ］
さて私の職業はなんなんですか？作者さん？
［シ］
保健室の先生とか？
［作者］
もちろんセリフはあのシスターのセリフね♪

［フィ］
いやです

［作者］
即答ですね～じゃあ何がいいんだ？
［フィ］
そ、それはそのシロウさんのそばにいれればいいと言うかそのゴニョゴニョ

［作者］
あい？なんだって？ゴニョゴニョしか聞こえぞ
もちろん俺てきにシロウとはしばらく離すってのありかな～と思っ

てるんだよ！はははー

［フィ］

ぶち♪

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！！

［作者］

ギャブ！？ゴフ！？ガバッ！？

ちょ！？まっグフ！？

［シ］

さよなら駄目作者〜

今度来るときはもう少し早く更新してくれよ？

外伝1お見合い（前書き）

書き置きのやつなので文章が荒いです（泣）

外伝1お見合い

ｓｉｄｅ　シロウ

「フォフォフォ　皆にも一応紹介しておこう――――新年度から正式に本校の英語の教員になる、ネギ・スプリングフィールド先生じゃ」

オオ～～～ッ！

「それと広域指導員になる、衛宮士郎君じゃ。」

……え？…え――――――！？

学園長あんた…まさか生徒たちの記憶を……

「……てへ」

てへ、じゃねえ――――――！？

ぶっ飛ばす！今このばでぶっ飛ばす！？

「お、落ち着いてシロウ！」

「はなせ！タカミチあれは一回あの（虎とブルマのいる）道場に逝

かないとダメなんだ！」

「あの道場って何！？」

バシッ！

「あう…」

「フフフ…ご主人様落ち着いてくださいね」

「はい…」

「それと…」

ヒューッ

プス♪

「おりょ？……お？なんじゃ？地面がちかずいて……おやすみなさい…ぐ～～」

「学園長！？」

「フフフ……お昼頃に起きると思います…よ？」

「なんか最後、妙に自信無さげですね！？」

「え～一部トラブルがありましたが気にせず、衛宮さん挨拶お願い

します。」

「あ、はい（学園長のあつかいが軽い！？）え～このたび、この学校で広域指導員になります。衛宮士郎です。皆さんよろしく」

パチ…パチ…パチパチパチパチ

あまり深くツッコム気にならないのか、考えることをやめたのか、まばらではあるが生徒たちは、拍手してくれた。

それから数日後…

「で？急用ってなんですか？」

俺は学園長（麻酔が強すぎたのか学園長は3日ほど寝てました。）に呼び出されていた。

「依頼したい仕事があるんじゃか……とりあえずこれを着てこの場所に行ってくれんかのう？」

「ん？とりあえずなんの仕事だ？」

「まずそこに行ってお見……じゃなくて依頼を聞いてくれんかのう？」

「？ああ、一応行くが、やるかどうかは別だぞ？」

「かまわんよ…（行ってさえくれれば）」

「なんか言いました？」

「フォフォフォなんもいっとらん」

「そうですか？それじゃあ行ってきます。」

バタン！

扉がしまる

フォフォフォフォフォフォフォ

「ここか？」

ガラガラ

「え？シロウ君？」

ん？そこには、着物姿の大和撫子がいた。

「えっと？どちら様？」

「ありゃ…ウチやウチ」

「え…ウチ…あっ！このかか？いやあまりにも綺麗だったから、一瞬誰かと思ったぞ」

「ほんま？うれしい―わ―。」

「あっ！そういえばシロウ君こんなところでなにしとるん？」

「ああ、学園長にここにくるように言われたんだか……」

「え？おじいちゃんが？」

「ああ、仕事の内容も言わず、とりあえずここに行けって言われてな。」

それを聞いて、なんだかこのかが申し訳なさそうにこちらを見てくる。

「あんなー、多分それウチとお見合いさせるためやと思うよ？」

はい？お見合い？

「うちのおじいちゃん、私にお見合いさせたがるんよ。それで今日もお見合いすることになって、あいては誰かとか教えてくれへんかったから逃げて来たんやけど……」

ここがお見合い会場だったと言うことか……あの学園長！

「ごめんなシロウ君」

「いや、謝らなくていいよ。このかも被害者みたいなもんだろ？」

「そやけど……」

このかが本当に申し訳なさそうにしている。

「そうや！せっかくやし、このまま少しお見合いせえへん？」

「いきなりだな～俺みたいのと、お見合いしたって面白くないぞ？」

「ええよ！お見合い言うたけど少しお話するだけやし」

「ん～そうか？それじゃあ、俺なんかで悪いけどよろしくな」

「うん♪」

それから料理や占いの話で盛り上がった

占いの方は、なかなか良い結果が出なかったが料理のほうでは、互いの得意料理や外国の料理の話などもした

「ふ～結構話したな～」

「そうだな」

「ありがとうな～、シロウ君」

「いいや、お礼を言われるようなことは、してないぞ？」

「俺も好きで話してるんだからさ、それにこのかはもう少し我が儘言ってもいいと思うぞ？」

「我が儘？」

「ああ、あんまり人を気遣いしすぎてもストレス溜まるだろ？だから少し自分の我を通すこともしないと学園長もこれからもお見合いさせ続けるだろうから大変だぞ？」

「ん～～そやな～～そうや！シロウくんストレス解消にいっしょにおじいちゃんお仕置きしに行こ♪」

「ああ、いいなそれ！俺もあの学園長には少しお灸をすえてやらないとって思ってたとこだ」

「ほんならレッツゴー！」

後日赤い布でグルグル巻きにされ頭にタンコブを大量につくって吊るされている学園長が見つかったそうな

「はぁ～スッキリしたわ～」

「ああ、俺もこれでスッキリと新学期迎えられそうだ」

俺たちは学園長にお仕置きをした後アヴァロンに来てまったりとしていた。

「どうなさったんですか？」

「あ！フィリアさんや～」

「ああ、フィリアか、実は――」

「あんなフィリアさん！今日なシロウとお見合いしてな、それで学園長をお仕置きしたんや！」

いやいや、はしょり過ぎだろ！

「……お見合い？」

辺りに急に不穏な空気が漂いだした。

「え？いやいや違うんだ形てきには確かにお見合いみたいな感じだったが、実際ただ話をしてただけだぞ！」

「別に御主人様が言い訳しなくてもいいです。私にはまったく！これっぽっちも！関係ないですから！！」

いや、フィリアは怒ってるなぜか知らないが怒ってる

何故わかるかって？

フィリアが俺のことを御主人様って呼ぶ時は大抵怒ってるんだよ！

それをそのまま放置して何度親父に会ったことか……

く！このままでは、マズイ！今度は綺麗な川と橋をわたるくらいじゃすまないかも！？

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

あ…魂のこもった熱き拳の音が……もう…駄目か……親父すぐに逝くよ……

「このフラグ男ーーーーーーーーーーーーー！！」

「ぐがっ――――――！？」

カンカンカンカーン♪

１ラウンドＫＯ！！

決め手：　光速スクリューパンチ

「ははははシロウ浮気がバレてるようじゃ、まだまだだよ♪」

親父…一体なんのアドバイスだ……それに…その肩に抱いてる女性は一体誰…すか…

パタリ……

外伝1お見合い（後書き）

次のも書き置き

故につまらないかと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8263m/

理想を追い続けた錬鉄者の祈り

2011年5月16日08時42分発行